

和のこころ

親鸞聖人のご和讃

二



龍谷大学教授
たまき こうじ
玉木 興慈

如来大悲の恩徳は

身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も

ほねをくだきても謝すべし

(註釈版聖典610ページ)

【現代語訳】

わたしたちをお救いくださる阿弥陀
仏の大きい慈悲の恩徳と、教え導い
てくださる釈尊や祖師がたの恩徳に、
身を粉にしても骨を砕いても、深
く感謝して報いていかなければならな
い。

(現代語版『三帖和讃』163ページ)

ありがとう

私が小さい頃からかわいがっていた
いた、ご門徒のおばあちゃんの七回忌の
ご法事がありました。四人のお子さん、
といっても六十代の方々は、皆さん、嫁
がれたり、独立されたりしていましたの
で、ご自宅でお一人で過ごしておられま
した。晩年には体が弱り、認知症も出
きたようで、仲のよい四人の兄妹で話
合われ、代わる代わる交替で泊まり、介
護をされましたが、最後は施設に入れ
ました。入所されるまでも、デイケアサ
ービスやショートステイを利用してお
られました。その頃から施設の方には大
人気だったようです。

「ありがとう」の言葉を大切にされて
いたからだそうです。食事のお世話、お

部屋のお掃除、ベッドメイク、お風呂の
介助…。何をしてもらっても「ありがと
う」の言葉を欠かさなかったそうです。
「ありがとうが口癖になっていたから、
おかあさんは得な人やった」とご法事の
席でおっしゃった方は、口癖だから本当
にありがとうって思っていたかどうかは
わからない、というニュアンスも含んで
おられました。お若い頃からの口癖で
しょうし、笑顔のかわいいおばあちゃん
でしたので、施設の方にも好かれただろ
うなあと思いつながら、お元気な頃のこと
を思い出していました。

そういえば、祖父・父に続いて、私が
初めて寄せていただいた時には、「あんな
にちっちゃかったのに、二代目やねえ」と
涙を浮かべて喜んでくださいました。毎
月の月忌参りに寄せていただいた時にも、

和のこころ

親鸞聖人のご和讃

二

「雨が降るのにお参りいただいて…」などと、毎回のように「ありがとう」を言っていたきました。

ところが、何度か、その「ありがとう」を聞けなかったことがあります。おばあちゃんに他意はなかったと思いますが、無意識に、「ありがとう」を期待していた自分がいたことを恥ずかしく思います。「ありがとう」の言葉を期待するのは、煩惱の証あかしですね。お恥ずかしいことです。

二つの恩徳讃

先月から「和のこころ」と題して、親鸞

とということ。一つは澤康雄さんの作曲。もう一つは清水修さん作曲の恩徳讃です。本願寺派では、前者を旧譜と呼び、後者を新譜と呼んで区別しています。現在は新譜が一般的なのですが、両方を歌っているお寺もあるでしょう。読者の皆さんも、両方をご存じの方がいらっしやると思います。

私が幼い頃は、毎月の定例法座で、昼のお座では新譜を、夜のお座では旧譜を唱和していた記憶があります。今でも車を運転しながら、一人で旧譜を口ずさむことがあります。

恩を知る、恩を報ずる

恩徳讃では、「身を粉にする」「骨を砕く」という、すさまじい表現がされていますが、現代語では、粉骨碎身という言葉

聖人のご和讃について話をさせていたいています。元号が令和と改まり、その最初の号にあたりますが、最初のご和讃は恩徳讃として親しまれているご和讃です。親鸞聖人の「浄土和讃」「高僧和讃」「正像末和讃」をあわせて古来「三帖和讃」と呼んでいます。恩徳讃は「正像末和讃」の一首です。

最近では、本願寺出版社から海谷則之先生が『恩徳讃ものがたり』を出版されています。この中で先生は二つの恩徳讃について紹介されています。法要などで一緒に唱和する際のメロディーに二種あります。恩徳讃の表現は「粉身碎骨」という熟語になりそうですが、いずれにしても、力の限り努力するという意味です。

このような表現は、法然聖人の門下で、親鸞聖人より六歳ほど年長の聖覚法印が、法然聖人に対する恩徳を表された時のお言葉を参考にされたものと考えられています。

また、七高僧の第五祖である善導大師の『観念法門』というお書物にある「身を粉にし骨を砕きて仏恩の由来を報謝して」(註釈版聖典七祖篇637頁)というお言葉も参考にされたと考えられるでしょう。

親鸞聖人は、善導大師や聖覚法印のお書物をもとに、阿弥陀さまの大いなる慈悲(如来大悲)や、それを私たちに説き

和

のこころ
親鸞聖人のご和讃

二

示してくださいましたお釈迦さま、インド・中国・日本にわたる祖師がたの恩徳は、「身を粉にしても」「ほねをくだけでも」報じていきたいほどの恩であることをうたわれました。

数年前にテレビドラマのセリフから「倍返し」という語が流行しましたが、「如来大悲の恩」「師主知識の恩」は、倍どころではありません。どれだけ返したとしても、それで充分とは言えないほどの大きく深いご恩なのです。
なぜ、これほどの深く大きな恩ということができのでしょうか。

たいということです。

『広辞苑』には、「恩」に関して、「恩を売る」「恩に着せる」という表現が紹介されています。恩を売るとは、相手からの見返りを予期して恩を施すことと説明されています。また、恩に着せるとは、恩を施したことを相手にありがたく思わせるような言動をとることと説明されています。

私たちは時として恩を売り、恩を着せてしまうことがあります。相手からの「ありがとう」という言葉を期待して、恩着せがましい言動をしてしまうことがあります。

けれども、阿弥陀さまは私たちをお浄土に往生させてくださいますが、その恩を売ったり、恩に着せることは決してありません。阿弥陀さまは、私たちからの

阿弥陀さまの大いなる慈悲がなければ、お浄土に往生させていただくことはできません、このまま迷いの衆生・有情としての命を繰り返すしかありません。迷い続ける私たちが如来大悲によって、さとりのお浄土に往生させていただくことができます。迷いを繰り返すしかないはずの私たちが、お浄土に往生させていただけるのですから、これほどの恩はありませんね。

如来大悲のありがたさ・尊さに気づかせていただいた上は、どこまでもどこまでも、そのご恩に報い、恩に応えていき

「ありがとう」を求めてはおられないでしょう。

ですから、私たちからすれば、報いなければならぬという義務感ではなく、恩に応えずにはおられないということでしょう。

もう一つ大切なことは、恩をその通りにわかつていくかどうかですね。恩がわかれば、当然のようにその恩に報いたい、応えたいと思います。けれども、恩がわからない場合は、恩に報いたいという思いが出てくることはありません。

親鸞聖人が「正信偈」を書かれる時のお気持ち、直前の偈前の文に「仏恩の深遠なるを信知して」(註釈版聖典202頁)と述べられています。恩を報ずることと同時に、恩を知るということも大切に学ばせていただきたいところです。